

2021/01/03

ヨハネの福音書 講解メッセージ③①

『十字架の意味』 ヨハネ 10:11-18

「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。牧者でなく、また、羊の所有者でない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして、逃げて行きます。それで、狼は羊を奪い、また散らすのです。それは、彼が雇い人であって、羊のことを心にかけていないからです。わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。」

(ヨハネ 10:11-14)

イエス様は良い牧者なので、私たちのために十字架でご自分のいのちを捨ててくださいました。人間の世界であっても、本当に愛する者のためになら、いのちを惜しまないものです。つまり、いのちを捨てるとは、愛の大きさを表しています。イエス様が私たちのためにいのちを捨てたということ、それは、神の愛の大きさを示し、また、神から見た私たちの価値を示すものです。テレビの番組で、視聴者の家のお宝を専門家が鑑定するという番組がありますが、私たちの専門家は神様です。専門家の判断によると、あなたの価値は神のいのちを差し出しても惜しくないという価値です。それなのに、人は素人である人間同士の判断に気を取られ、自分の価値に全く気づいていません。

イエス様は「わたしのものは、わたしを知っている」と言われました。私たちは神のものです。ですから、私たちは神を知っています。しかし、この世に住んでいる私たちは、神を知っていても認識できません。「神」という方は永遠であり、自由です。それは、時間と空間の制約を受けないということです。だから、神は時代と空間を越えて存在しておられます。これに対して、この世は永遠でも自由でもありません。ですから、この世は神を認識できないのです。認識できない神を知っているとはどういうことか、それは、人は生まれながらに、この世にはない永遠と自由を知っているということです。死を恐れたり、長生きしたいと願うのは、永遠を知っているからです。自由が束縛されることに反発を覚えるのは、自由を知っているからです。それは、人は神を知っていることの表れです。また、神は愛ですから、私たちは愛を知っています。人を憎んだり、良心が痛んだり、和解を求めたりするのは、愛を知っているからです。

このように、私たちは神を知っているのですが、その神を認識することができないでいます。これが私たちの抱えている苦しみです。

## ■神の正義

「それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同様です。また、わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。」(ヨハネ 10:15)

よく災いが起きると、神の罰が下ったなどと言う人がいますが、本当でしょうか。良い牧者であるイエス様は、私たちが自由になり幸せになることを望み、私たちのためにいのちまで捨てられます。そのイエス様が、私たちに災いを与えるなどということがあるのでしょうか。

罰を与えることが正義だとする根拠は、罰を与えないと人は良くなならない、罰によって人は是正されると思うからです。しかし、罰によって行動を制するのは、恐怖で自由を奪い、強制的に行動を変えているだけです。この世界では、悪に対して罰をもって報いるのが正義ですが、神の中には、私たちから自由を奪うメカニズムはありません。神の中にあるのは、愛です。永遠と自由、いのちを与えるメカニズムです。ですから、神の正義は全く逆で、私たちからわざわいを取り除き、平安を与えるものです。

イエス・キリストは、人々を罰するためではなく、救うために来られました。神様は、汝の敵を愛し、罪を赦し、愛をもって接するように教えておられます。そうすれば、たとえ敵であっても、相手の頭に燃える炭火を載せることになるからです。愛と自由によって私たちの行動を変えるのが神の正義です。イエス様が、姦淫の現場で捕らえられた女性に石を投げて罰するべきだと主張する人々に対して、「罪のない者から石を投げよ」と言われたのは、このことを物語っています。

今、コロナは神の罰だと言う人々がいますが、決してそんなことはありません。神様は、この世界を病原菌で苦しめて、是正を求めたりはしないからです。神は私たちをそのまま受け入れ、さばきません。どこまでも肯定して認めることで、私たちを良い方向に導かれます。神はあなたを否定するものを取り除くのです。これが神の正義です。

「わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊があります。わたしはそれをも導かなければなりません。彼らはわたしの声に聞き従い、一つの群れ、ひとりの牧者となるのです。わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してくださいます。」(ヨハネ 10:16-17)

「囲いに属さない羊を導く」とは、神様は、まだ信じていない人に呼びかけ、神の元に導くということです。神様は、一人でも多くの人を救いたいと願い、決してあきらめず、見捨てないのです。

また、「イエス様が自分のいのちを捨てるからこそ、父なる神はイエス様を愛する」という言葉の本当の意味は、「父なる神もイエス様が十字架でいのちを捨てることを愛している」ということです。三位一体の神は同じ思いを共有しており、イエス様が十字架に架かることは、三位一体の神の総意なのです。

## ■なぜイエス様は十字架でいのちを捨てる必要があったのか

「だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」(ヨハネ 10:18)

## 1. 罪という病気を癒すため

人は皆罪人ですが、人間自身に問題があるわけではありません。すべての人は、死の恐怖によって罪という病気にかかった状態なのです。私たちが罪を犯す原因は、不安です。神によって造られ、神を知っているのに、神を認識できないという不安から、人は見える安心を求めて、仕事、音楽、芸術などで自分の可能性を迫り、神に代わるものを求めて生きています。それは、無意識に神と一つになろうとしている表れです。しかし、それは人の力によってバベルの塔を建てると同じで、偶像礼拝です。バベルの塔が、どんなに頑張っても天に届かず、それによって平安は得られなかったように、どんなに夢を追いかけても、夢に限りはなく、満足することはありません。これが不安の原因です。私たちが求めている「最高」「究極」とは、神を表す言葉であり、人が認識できないものです。つまり、罪の原因は「神の愛が見えない不安」なのです。

人間の行動の根底にあるのは「承認欲求」です。「愛されたい」「認められたい」「ほめられたい」、すべての人がこのような欲求を持っているのは、自分が愛される存在であることを知っているからです。「自分は愛される存在だ」という前提がなければ、「自分はダメなもの」という発想は生まれません。神を知っているとはそういうことです。

神は愛であり、私たちは神と一つであることを知っています。それを確認しようとして生きているのですが、この地上でそれを見つけることはできません。この世界の愛は、自分の条件に合うものでなければ愛せず、無条件で愛されることはありません。それで、自分は愛されるはずなのに愛されていないと感じて、嫉妬したり、怒ったりするわけです。また、人を愛したいと思って、相手に条件を突きつけ、相手が満たしてくれないと腹を立てます。これが人間社会です。人が罪を犯すのは、満たされない不安によって、見えるものをむさぼるからです。私たちが罪から救うことができるのは、無条件の愛だけです。神様は、あなたを無条件で愛すると言っておられます。それは、罪人をそのままの状態に愛し、罪を赦すということです。あなたがそれを知るためには、「自分の罪を神の前に告白すること」です。それは、神様は、どのような罪も決してさばかず、赦してくださることを体験するためです。

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」

(ローマ 5:8)

「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」(Iペテロ 2:24)

イエス・キリストは十字架に架かり、「私はあなたのためにいのちを捨てるほど、あなたを愛している」と教えてくださいました。これが、十字架の第一番目の意味です。私たちが求めていたのは、この愛です。受け入れられ、愛されることによって、いやされると、人は生き方・行いも変わります。

私たちが陥りやすい誤解の一つに、キリストの十字架は、あなたが受ける罪の罰の身代わ

りであるという説がありますが、神は罪に対して罰を与えませんから、この説は正しくありません。キリストが背負ったのは、私たちの「罪」であり、「罪の罰」ではありません。

## 2. 悪魔を滅ぼすため

私たちが、神の愛が見えなくなったのは、罪によって死が入り込んだからです。死とは有限性のことであり、否定する力のことです。アダムが罪を犯した結果、人類に死が入り込み、人は罪を犯すようになりました。アダムが罪を犯したのは、悪魔が蛇を使ってアダムとエバを欺き、神と異なる思いを、あたかもそれが神の思いであるかのように信じ込ませてしまったからです。神と異なる思いを持つことを、聖書は罪と呼びます。その思いとは、「否定」です。「否定」の大元はあなたのいのちを否定する死であり、アダムが神と異なる思いを持った瞬間、その大元の死と直結し、人に死が入り込みました。神は、「神と異なる思いを持つと必ず死ぬ」と注意しておられましたが、その通りになったのです。

聖書は「死は罪の報酬である」と教えています。「報酬」とは、誰かの意志によって与えられるものではなく、自動的に自分のものとなるもののことです。神がお与えになるものは「報い」と呼ばれます。多くの人が、死は人間が罪を犯した罰だと勘違いしていますが、死は神が与えた罰ではなく、神の敵です。

アダムが犯した罪によって死が入り込んでしまいましたが、この時、神様には、死を持ち込んだ悪魔を滅ぼす計画がありました。

「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」

(創世記 3:15)

「彼」とはイエス・キリストであり、「おまえ」と呼ばれているのは悪魔です。キリストは悪魔を滅ぼします。この時、「悪魔がキリストのかかとかみつく」とはイエス・キリストの手足を打ち付けた釘を想起させる表現で、十字架を表します。神様は人が罪を犯したその時、悪魔を滅ぼすことを宣言し、人間に対しては、次のようなことをなさいました。

「神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。」

(創世記 3:21)

神が見えなくなり、自分の姿しか見えなくなって恐れている二人を覆うために、神様は皮の衣をくださいました。ふたりがどんな状態になっても、神の目には高価で尊いものでした。それほどに、神の愛は変わらないのです。神様が二人に与えた皮の衣は、動物の犠牲によって得られるものです。これは、十字架を表しています。神ご自身が犠牲になってあなたを覆って助けるという約束が示されているのです。イエス様の十字架は、悪魔を滅ぼし、私たちが覆い包むために必要なものでした。それは、私たちが死の恐怖から解放するためです。

十字架は全き愛の象徴です。神様は、どんな者でも条件をつけないで愛しておられます。その頂点が私たちのためにいのちを捨てることです。これだけが悪魔を飲み込むのです。「否定」を飲み込む「肯定」、これが神です。十字架という完全な愛を実行することによって、悪魔は飲み込まれ、否定の力は完全に無効にされました。キリストは、悪魔を滅ぼし、死に勝利して復活なさいました。十字架の目的の第2番目は、私たちが苦しめている死をつかさどる悪魔を滅ぼすことです。

「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」（ヘブル 2:14-15）

### 3. 復活できることを示すため

「もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。」（ローマ 6:5）

私たちは、死んで終わりになるではありません。その先に復活の希望があります。そのことを示すために、イエス様は死んでよみがえってくださいました。ここに悪魔の誤算がありました。悪魔は、人間ごときのためにイエス様が本当にいのちを捨てるとは思っていなかったのです。十字架につけて殺してしまえば、イエス様は天に戻り、この世は自分のものになると思っていました。だから、イエス様を十字架につけるよう、人々を扇動したのです。ところが、イエス様が選択したのは、肉体の死ではありませんでした。表面上は肉体の死ですが、イエス様はまことの死を選択なさったのです。

死とは分断のことです。つまり、イエス様が選んだのは、単なる肉体の死ではなく、父と子と聖霊の三位一体の関係を分断するものだったのです。私たちは、死が入り込んだことによって神と分断され、神が認識できない恐怖の中で今生きています。イエス様は、この死を負って十字架に架かりました。これは、悪魔の予想外のことでした。悪魔は、まさか神が互いに見捨て合うという本当の死を選択するとは思わなかったのです。

「そして、三時に、イエスは大声で、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」と叫ばれた。それは訳すと「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。」（マルコ 15:34）

イエス様は、ここで父なる神と聖霊なる神との完全な分断を宣言なさいました。今まで経験したことのないこの全き愛で、死を飲み込んだのです。

「そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネをいっしょに連れて行かれた。イエスは深く恐れもだえ始められた。そして彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、目をさましていなさい。」(マルコ 14:33-34)

神であるイエス様にとって、この地上でのいのちが終わることは天に帰ることですから、苦しみではありません。しかし、自ら進んで三位一体の神を分断することは、神にしか選択できないことです。イエス様が「わたしには、いのちを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威がある」(ヨハネ 10:18)と言われたのは、このことです。それは、父なる神にとっても聖霊なる神にとって苦しみでしたが、それをしなければ、悪魔を飲み込むことはできなかったわけです。これが十字架の深い意味です。

このことがわかると、神がどこまで本気で私たちが愛しているかがわかります。ただ単に口先で「愛している」と言うのではなく、羊のためにいのちを捨てるという本気を実行したのが十字架なのです。この愛を知るとき、私たちの苦しみ、悲しみ、すべての否定は飲み込まれてしまいます。全き愛はすべての恐れ、恐怖を締め出すのです。

困難にぶつかってもあなたを見捨てず、条件をつけずに、あなたを苦しめるものを飲み込み、まことの自由を与えるのが神の正義です。羊のためにいのちを捨てる牧者であるイエス様は、十字架でこの正義を実行なさったのです。